

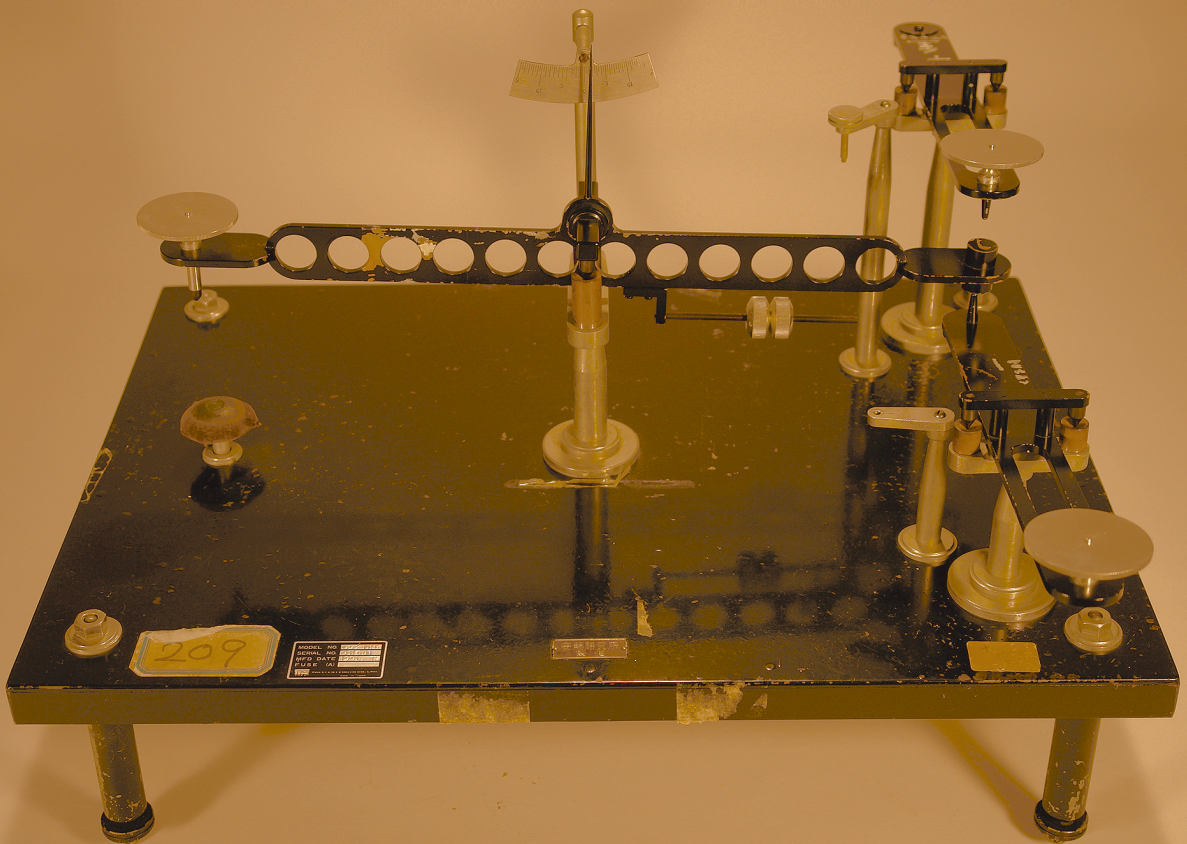
# 心理学 ミュージアム

立教大学現代心理学部教授  
長田佳久



*Profile* — おさだ よしひさ  
1975年、名古屋大学文学研究科修士課程修了（心理学専攻）。立教大学文学部助手、助教授、教授を経て、2006年より現職。1992年から1995年、2000年から2001年、マサチューセッツ工科大学客員研究員。専門は実験心理学（知覚、比較認知）。

これは なに？



立教大学心理学研究室所蔵。購入年次不明。安藤製作所のラベルが中央に見える。

これは、ヴント (Wundt, W.) の圧秤といわれるものです。圧や触の感覚の変化 (弁別閾) を測る道具で、心理学教室にしかみられない歴史的機器です。日本でもかなり普及し、いろいろなレプリカがありました。

日本初の専門的心理学者、元良勇次郎はこれを改造し『アメリカ心理学雑誌』創刊号 (1879 年刊行) に圧の感受性の論文をホール (Hall, S.) と連名で発表しました。ホールは実験心理学の創始者ヴントの弟子でしたから、心理学はヴントからホール、そして孫弟子の元良とストレートに日本に伝わったわけです。おもしろいことに、実験機器を調べてみると先人たちの機器を巡る苦労や秘話、歴史の向こうに消え去った人物の息づかいが聞こえてきます。ご年配の心理学者に伺っても使い方がわからない機器に出会うこともあり、時にミステリーを探る探偵にもなります。実験機器だけでなく、過去の発達テストや臨床の検査用具も使い方がはっきりしないものまで出てきました。

消え去りつつある心理学の機器をアーカイブ化することは、心や行動を「測る」道具の歴史を残すことだけでなく、現代に生きる私たちが歴史的発見や現象をリアルに体験できることでもあります。ここ数年、立教大学を拠点に 40 名以上の全国の研究者が集い、機器や資料のデータベース作成のため活動しています。現在の日本には心理学のミュージアムは一つもありませんが、将来、だれもがアクセスできる映像豊かな心理学デジタルミュージアムをつくることをめざしています。



ヴィルヘルム・ヴント  
(1832-1920)

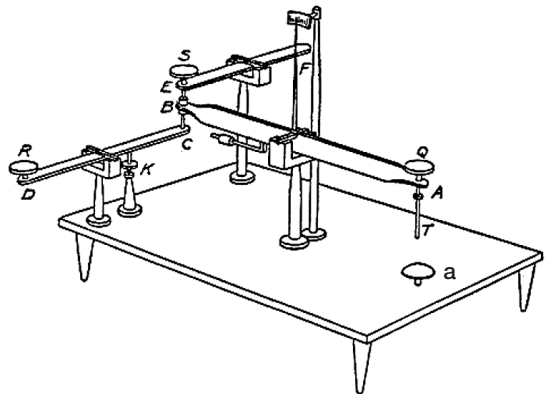


スタンレー・ホール  
(1844-1924)



元良勇次郎  
(1858-1912)

どう使ったかって？ イラストで一例を説明しましょう。円形の皿 Q に 50g (標準刺激) の錘を置き、S に 4g, R に 4g の錘を載せて釣り合わせてから、目を閉じて a の指載せ台に人差し指の腹を上にして、T に接して置きます。実験者が D を上に上げるか、F を下に下げると、参加者の指に 4g 分の変化 (減少か、増加) が起こり、その重さの変化が感知されたかどうかを「重くなった」「軽くなった」「変化しない」「わからない」と報告します。重さの変化の閾値 (弁別閾) は心理物理学的測定法の一つである恒常法を使って求めます。



Jacobson の改良した Stratton の圧秤  
荻阪良二 (1998) 『心理学評論』 41 より転載

文献

大山正 (2010) 『心理学史：現代心理学の生い立ち』サイエンス社